九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

存在の比喩的解釈

菊地, 惠善
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門 : 教授 : 哲学

https://doi.org/10.15017/1162

出版情報：哲學年報. 61, pp.43-73, 2002-03-20. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

存在の比喩的解釈

菊地惠善

一　はじめに

哲学の立てる問題は、ある独特な奇妙さを持っている。まず、ある哲学の問題があるとして、どうしてそうした問題が問題になるのか、一般の人にとっては元より、それを専門とする哲学者や哲学研究者にとっても、よく分からないことが多い。次に、それと連動して当然のこととして、そうして立てられた哲学の問題が一体どのように答えられるべきなのか、もし答えられるとして、どのように答えられた時に正しく答えられたことになるのか、これもまたよく分からないことが多い。問いという出発点も答えという到達点も曖昧不明瞭だとすれば、その問題の解決に向けて考える作業はまるで、どこからどこへ向かって進んでいるのかわからない道を手探りで暗中模索しつつ進むようなものである。

科学の立てる問題はこの点、問題の設定とその解決が比較的明確である。例えば、狂牛病という病気である。まず、一連の症状を示す牛の病気がなぜ起きるのか、という形で問題が立てられ、次に、その病気を引き起こす原因が探求される。そして、その原因が特定された時、あるいは、その病気が発生するメカニズムが解明された時、問題は解決されたことになる。その際、探求の結果得られた解答が正しいかどうかは、その原因やメカニズムを人為的に操作して、病気を発生させたり防止したりして、実験によって実際に検証される。もちろん、ある現象を引き起こす原因が多数あって特定できない場合や、隠れたメカニズムが複雑過ぎて、一義的な因果関係に還元できない場合もある。例

えば、有明海の海苔養殖被害である。養殖海苔の色落ち現象という結果を引き起こした中心的な原因は何か。諫早湾の干拓事業との関連が推測されているが、果たして両者には必然的な因果関係があるのか。海水の温度や塩分濃度とプランクトンの繁殖状況との関係はどうか。問題となる現象の規模や性格に応じて、科学的探究はより多面的に、より広範囲に進められることになるだろう。

これに対して、哲学的な問題は、問題の設定も問題の解決も、そしてさらに、その解決を求める方法も、一定の手続きとして哲学研究者に予め共有されているわけではない。哲学の問題とされているものについては、そもそも答えられない無意味な問いだとして、それが問題であること自体が否定されることもあるし、それが問題であること自体は承認されても、それを解決する方法が複数唱えられることもある。そして、哲学的な問題に対して与えられた解答も、後続の研究者によって根本から批判吟味されて、間違ったものとして否定されたり、肯定されるにしても大幅に修正されたりしてしまう。

こうして、哲学においては、それが立てる問題がどうして問われなければならないのか、その問題にどう答えれば問題が答えられたことになるのか、そして、問題に答えようとした場合、どういう風にして考え進めるべきなのか、これらすべての点において頼るべき自明な共通理解はないのである。

そこで「存在（ある）」についてである。周知のように哲学は古来「存在」を問題にしてきた。がしかし、なぜ哲学は「存在」を問題にするのか、そして、それをことさらに問題に立てて考え進めることによって一体「存在」の何をさらに知ろうとするのか、これら一番基本的なことがやはり不可解である。問題を立てて考える哲学者は無論のこと（全く知らない事柄について問題を立てることは不可能であるから）、哲学者ではない私たちも、問題にされる「存在」が何であるか、それはもちろんよく知っている。自動車や雲や漢字が「存在」していること、本のような目に見えるものだけではなく、人の心といった目に見えないものも「存在」していること、また、人類の過去の歴史や自然

界に働いている物理法則も「存在」していること、これらはごく当たり前の常識である。私たちは、たくさんの存在するもの、存在の仕方の異なるさまざまなものに取り囲まれて、そして、それらたくさんの存在するものに気遣いながら毎日を生きている。生きている限り、私たちが「存在」しているものに出会わないことは決してありえないし、そもそも最も身近な「存在」しているものである自分（自己）として「存在」することなしには、私たちは一日として生きることができない。

私たちは「存在」をよく知っている。だから、「存在」が問題になるとすれば、それがなぜことさらに哲学で問題になるのか、がそもそも問題であるし、一応それが問題であることに十分な理由が見出されたとして、その問題はどのように答えられた時に解決されたことになるのか、がまたもう一つ別の問題になるだろう。

二　存在が哲学的に問題になる場面

あれこれの数多の存在するもの、あれこれさまざまに異なる存在の仕方、そして、総じてそれらすべての存在するものからなる一つの全体としての世界、あるいは、そうしたものとしての世界を今現に存在するものとして捉えている自己自身、これらすべてに共通する「存在」は、もし問題になるとすれば、どういうふうに問題になるのだろうか。「存在」を「存在」として問題にするとすれば、それがそれとして理解されている、さまざまな意味や場面や領域を越えて、それらすべてを包括するような地平なり次元なりが予想されていることになるだろう。それがどういう地点であるかは未だ分からないにしても、「存在」を問題にする時には、そのさまざまな意味を包括する、より一般的な地点に向けて私たちは常識の自明性を越え出ているはずである。

あれこれの「存在」についてではなく、総じて「存在」一般について、その意味を問う問題を立てること、これはそもそも一体どういう場面で起きるのだろうか。そうした場面と考えられるものを以下いくつか見てみることにした

い。もちろん、ここでは既に哲学的な問題として洗練された形において提起されるようなものとしてではなく、それ以前に、日常生活のさまざまな場面で否応なしに出会われるような形において概観しなければならない。なぜなら、今ここで求められているのは、哲学的な問題の正当性をその発生の現場で確認することだからである。哲学的な問題は確かに、哲学的に探究されなければならない。だが、どんな哲学的な問題も、もし哲学が常識的な理解の反省的な吟味であり、その批判的な考察であるとすれば、その発生の理由は私たちの日常的な現実の中に見出されるはずである。したがって、「存在」への問いかけも、哲学的な探究が始まるのに先立って、私たちが既にどこかで出会っているはずである。

（一）何が本当に存在するのか

さまざまなものがさまざまな形でこの世には存在している。形状も性質もそれぞれ違えば、存在の仕方や認識のされ方もそれぞれ違う。（液体状のものと粒状のもの、固いものと軟らかいもの、目に見えるものと目に見えないもの、触れられるものと触れられないが頭で理解することのできるものなど。）

そこで、存在するものが種類や領域に従って分類されることになる。あるものがどういう種類のどういうものであるかを知らなければ、それを適切に使えないし、自分が必要とするものを探し出すこともできない。例えば、小麦粉と片栗粉の違いが分からなければ、てんぷらもうどんも作れないし、リキッドペーパーが何であるか分からなければ、書き間違えた字を修正することもできない。

存在するものを目的や用途、種類や領域に従って分類すること、ここまでは日常生活の必要性に基づいている。しかし、そうしたさまざまなものが存在する事実を踏まえた上で、次に、「何が本当に存在するのか」という問いが忽然と涌いて来る。さまざまなものがそれぞれの存在の仕方に応じてその数だけ存在するのか、それとも、存在するも

のは相互に連関しているのであって、現象となって現れるものの数だけ存在するのではなく、現象となって現れるものはいくつかのより基本的なものから構成されていて、それら要素的事物の現象形態として理解されるのか、「本当に存在するもの」を求めて、千変万化する現象の多様性は乗り越えられることになる。何が本当に存在するのか、この問いこそが人間を宗教や科学、そして哲学へと駆り立てた根本的な動機であろう。分子や原子や素粒子、魂や霊や神、アトムやイデアやウーシアなど、本当に存在するものを目指して人間の思弁は繰り広げられてきたのである。

（二）真と偽、あるいは、本当と嘘について

何が本当に存在するのか、この問いはただ単に人間の科学的あるいは形而上学的関心を引き起こすばかりではない。もっと日常的な場面で、現実の切実な要求から、事実が本当はどうなっているのか、話題になっている事実が本当はどうなっているのかが問題になるときに、その真と偽を判別する必要からも生じてくる。

例えば、交通事故である。道路左側に路上駐車した自動車が数台続いているような状況で、その傍を中央線寄りに道路を通り抜けようとするとき、前方に止まっている車の陰から人が突然とび出してきて、その人を死傷に至らしめるといった事故がある。この場合、事故に対する責任を明らかにするためには、進行中の自動車、駐車中の自動車、その車の陰から道路に飛び出した歩行者、それぞれの位置関係、注意の程度、気象条件などが調査されることになるだろう。責任の所在を明らかにする必要のある事件や事故については、事実が実際にどうであったかを厳密に確定する必要がある。そして、事実とは一般的に言えば、さまざまな証拠や証言を基に客観的に確定された存在のことであるから、事実の真偽が問題になるとき、そこでは事実という名の存在が問題になっていると言えるだろう。

複数の証言の関係、証言と出来事との関係、出来事と出来事との間の因果的な関係、目的や意図や動機といった関係者の心理的な要素、社会的な常識や専門的な知識、あるいは当該の状況についての認知内容等々、多数の観点から

事実の真偽は検証され確認されなければならない。事実という「存在」は、単に起きたことや偶然に与えられたことではなく、探究され確証されなければならないことである。だから、ここでも「存在」は自明なものではないのである。

真偽を判定することが存在にかかわること、これは、人間の言ったことの真偽が問われる場合、つまり本当か嘘かを判定しなければならないときに、より一層際立ってくる。例えば、ある人が「私は昨日A氏に会った」「私はB氏にお金を貸している」「私はC氏を知らない」とか言ったとき、それぞれの必要に応じて、その発言内容が本当か嘘か確かめられなければならないことになる。ある発言が本当か嘘かいずれかに決定されるということは、ある内容とそれと正反対の内容が同時に成り立つようには現実が出来ていないということであり、発言内容に関してか、あるいは、その発言内容が対象としている事実に関してか、現実はその存在に関して、ある何らかの秩序なり構造なりを持っているということを意味している。つまり、真偽を問うことができるということは、それを判別する基準が現実そのものを成り立たせる構造として予め前提されているということである。

嘘が嘘とわかることは同時に、事実が本当は何であるかがわかることである。だとすれば、本当か嘘かについて私たちが問うときには、私たちの現実が本当は、そのように問いかけることによって初めて明かされてくるということである。事実という「存在」は、その真偽を問いかけることによって明かされるのだとすれば、真偽いずれかの判別を可能にする条件として、それが何であるかがそもそも私たちに明かされるということ、すなわち「真理」と呼ばれる事態と密接不可分だと考えられる。

（三）言葉は何を表現しているのか

現実自体のうちには真も偽もない。人間が現実について何かを語ったときにはじめて、現実に関して真偽の問題が

生じるのだと言われる。天気は晴れているときには晴れているし、雨が降っているときには雨が降っているだけで、現実はただそのまま現実であるだけである。ところが、「外は今雨が降っている」と語られたとき、その発言は現実の事態に言及したことになり、そこに言語表現としての意味と、その意味が指示する現実の事態とが、お互いに独立した事象として成立し、両者の関係に関して真偽の問題が生じてくる。

言葉は外の現実や内なる現実に言及することによって真偽の問題を人間にもたらしたが、さらに一般的に、言語表現はそれ自体で意味的に理解可能であることから、「意味」と「存在」の関係に関する、より普遍的な問題を人間に課すことになる。「意味」と「存在」の乖離からすると、一方では、「意味」として理解されるものの範囲の方が「存在」の範囲よりも広くて、前者の一部が「存在」に現実化されているように思われながら、他方では、「存在」の範囲の方が「意味」として理解されている範囲よりもはるかに広くて、前者のごく一部しか「意味」として理解されていないようにも思われる。果たしていずれがいずれを現実化しているのであろうか。例えば、蕪村の発句「五月雨や大河を前に家二軒」において、言語は現実の描写に奉仕しているのであろうか、それとも、ある現実がそれとして現出すること自体に貢献しているのだろうか。

（四）否定や無など

言葉を使うことによって人間は初めて、言葉と現実の乖離に気付く。それによって人間は、真理と虚偽の区別を知り、本当と嘘の違いに目覚める。「私はお金を持っている」や「私は君を愛している」といった例を見れば明らかなように、真理と虚偽、本当と嘘の差異は人の一生を左右しかねない程までに重要である。

どうして言葉によって初めて真理と虚偽の区別が生まれるのか。それは、あるがままの現実をあるがままに語れば言葉は真理となり、現実をあるがままにではなく、それとは違った姿において語れば言葉は虚偽になるからである。

では、現実をあるがままに語るとはどういう仕方で語ることなのだろうか。机の上にパソコンがある時に、「机の上にパソコンがある」と語れば、確かに言葉はあるがままの現実を言い当てているように見える。それでは、同じく机の上にパソコンが置いてある時に、「机の上にテレビはない」と語ったとすれば、それはあるがままの現実を言い当てたことになるのだろうか。机の上にパソコンがあるのがあるがままの現実だとして、テレビが無いという現実は前と同じような意味であるがままの現実なのであろうか。

否定判断という言語表現に対応する現実は、現実の中にその一部として存在するのだろうか。それとも反対に、現実を言語的に理解し表現する人間の意識の中にのみ存在するのだろうか。つまり、先の例で言えば、机の上にパソコンがあるのを見て、しかし、テレビがないことに気付いて、その見られた現実に考えられた意識内容を重ね合わせたときに、「机の上にテレビはない」という表現が成り立つのであって、否定判断は、見られた現実に対して、別の可能的な現実を想像することができる、人間の意識の中にのみ存在するのだろうか。

何かが無いというのは、判断の上から見れば「否定」であり、それを対象化してみれば「無」である。こうした否定や無もまた「存在」の一部なのだろうか。既に見たように、真偽の問題は、存在や真理の問題と密接なつながりを持っていると考えられる。だが、虚偽や嘘もそれとして成り立つことを考えると、つまり、それが偽であると明かされるまでは真として妥当し通用しうることを考えると、虚偽や嘘に対応する否定や無もまた、存在や真理の問題と決して無関係ではありえないものと予想される。「存在」は「無」とどういう関係にあるのだろうか。

（五）時間的なもの、あるいは、事物の因果連鎖について

杉や松、猫や犬、自動車や道路、ビルや家、そして家族や社会の人々、これら存在するものはすべて、いずれいつかは滅び去っていく。それとして存在している時間の長さはそれぞれに違っていても、例外なくすべてが必ず滅んで

消えていく。時間の観点からこの世界を見れば、この世界の内にあるものはすべて一時的なものでしかなく、未来永劫にわたって永遠に存在し続けるものはないように思われる。「思われる」という言い方をして断定を控えたのには十分な理由がある。と言うのも、すべて存在するものがいずれ滅んで消え去っていくと経験的に知ることができても、私たちは誰一人として、時間の破壊作用を免れて永遠に存在し続けるものがあるかどうか、自分の経験から知ることはできないからである。

すべてのものが時間の中で生成消滅の経過をたどるのを見た時、果たして何が本当に存在するのかという問いが不可避的に生じてくる。この問いに対しては、時間を超越して永遠に存在し続けるものはないとも、正反対に、時間に制約されたこの世界に存在するものではない何かが存在するとも答えることができる。肯定と否定の答え以外に第三の選択肢として、同じく時間の中に存在するものである人間には、この問いに答えることはそもそも原理的にできないのだと答えることもできる。

この世界の中に存在するものすべて、そして同じくこの世界の中に生じる出来事すべては、それが今そのように存在することに関して、その原因を持っている。今現在存在するすべては、それに先行する原因の働きの結果として存在している。すると、ある何かについて、その原因を探して、原因の原因の、そのまた原因という風に、過去に向かって無限に時間軸をたどっていくこともできるし、それがもたらす結果を考えて、結果の結果の、そのまた結果と言う風に、未来に向かって無限に時間軸をたどっていくこともできる。過去から未来に向かって無限に続く因果の連鎖を考えると、この世界全体の向かうべき方向、この世界が存在していることの意味を考えざるを得なくなってくる。

単に存在するということではなく、「なぜこのように存在するのか」という問いは、時間の中で生成消滅していくものを眺める人間、あるいは、あるものがそうであることに対して、その原因を時間軸に沿って考えることを習慣とする人間にとってこそ生じるのではないかと思われる。ものを原子に、生命を遺伝子に、時間を物体の運動に還元し

て説明することに成功した時に私たちが知るのは、この世界が正にこのような世界として存在していることについては、そうした説明や理解が結局のところ何も教えてはくれないということである。

あれこれのものは時間の中で生成消滅していく。また、何かあるものについて、それがどうしてそうであるかについては、他のものとの関係、とりわけ他のものとの時間的な関係から理解することができる。しかし、あれこれのものが生起する場所としての世界そのもの、あれこれのものが相互に関係し合っている場所としての世界そのものについては、それがどうしてそうであるのか、さらなる理由や根拠を人間が問い求めるのは、あるいは、問いかけざるをえないのは、やはり、人間のみが時間を知っているからではないだろうか。個別的なもの、過ぎ去るもの、事実的なもの、こうしたものが現象する地平を越えることができるのは、それらが現象する形式である時間が私たち人間に属するからではないだろうか。あれこれの存在するものを総じて存在するものとして理解している人間が、そのように存在しているものを時間的な関係の中で捉えていること、この事実の中には、「存在」と「時間」の隠れた紐帯が秘められているように思われる。

(六) 偶然的なもの

最後にもう一つ、私たち人間が「存在」の不思議さを痛切に実感させられる場面を上げれば、それは、偶然的なものに出会う場面である。

世の中にはたくさんの人間がいるが、その人間は誰しも、自分が人間の一人であることを知っている。ところが、自分が一人の人間であることと、その一人の人間が他ならぬこの自分という人間であることとの間には、決して同一視して済ますことのできない溝がある。私も人間であり、あなたも人間である。しかし、私はあなたではなくこの私であり、あなたもこの私ではなくそのあなたである。私もあなたも同じ人間であるのに、取替え可能な無差別な人間

として存在しているのではなく、私は私、あなたはあなたとして全く別個の人間として存在している。私もあなたも同じ人間であると理解することはできても、私がこの私であることは、私が人間であるということからだけでは理解できない。私という存在は、一般的な知識や理解では埋められない偶然性の謎に包まれている。

この偶然性は、その目で見ればこの世界のいたるところに見出される。私がこの私であること、男性であること、日本人であること、現代人であること等々、すべて私に関わる具体的な条件はすべて他のものでもありえたのであり、その限りでそのどれもが偶然的なものに過ぎない。人間が両親の下に生まれてくるのは必然ではあっても、私がこの両親の下に生まれてきたのは偶然である。人間が成人して結婚するのは一般的なことであり、結婚しようとする限り、特定の誰かをその相手として選ぶことは必然であっても、他ならぬこの人を選んだのは偶然である。

物事を一般的な側面においてではなく個別的な側面において捉える時、それら両面の対比が私たちに偶然性の意識を呼び起こす。個別的な条件でさえ偶然であるのだから、いくつかの条件が重なって起きる具体的な出来事は、それだけ余計に偶然的なものに見えてくる。例えば、交通事故である。夜間走行中の自動車が、道路を横切ろうとしていた老人を撥ねて死なせる事故がある。自動車と老人が同時刻にその事故現場に通りかかったこと、それぞれが相手に気付かなかったこと、これだけでも偶然的な出来事である。ところが、これにさらに道路の状況や気象条件、そして人間の条件、つまり、運転手は飲酒して酩酊していて、老人は痴呆によって徘徊していたという事情が付け加われば、たった一つの出来事ではあっても、それについての偶然性の意識はさらに強まるだろう。

では、なぜ偶然性の意識は人間を「存在」に直面させるのだろうか。それは、人間がさまざまな偶然的な条件を担いながら、この私として、そのつど特定の行為をしつつ生きるしか他ないからであり、人間や社会についての一般的な知識によって汲み尽くされないものとしての自分自身に直面せざるを得ないからであろう。人間が死ぬことは必然的な定めであっても、私は自分が死ぬことに対して無関心ではいられないし、いろいろな人間から成る社会の中でし

か人間は生きられないと知ってはいても、どの人間も他人一般ではなく、それぞれ別個の人間であり、私たちは自分が出会った他人のそれぞれの違いに無頓着でいることもできない。一般なものの持つ必然性の中においてではなく、個別的なものの持つ偶然性の中で、私は自分の存在を知り、他人の存在を知る。偶然的なものによって私たちは「存在」に驚くのである。

個別的なものの偶然性によって私たちは、「存在」の不思議さに驚く。偶然性の意識とは、あることが他のようでもありえたのに、他のようではなく正にこのようでしかないということの意識である。例えば、自分の顔、自分の家族、自分が巻き込まれた交通事故など。これらすべては、どれもが他のようでもありえたと考えられるにもかかわらず、与えられた現実としては現にこのようにでしかなかったことであり、今さら他のものに変えることのできないものである。あることが他のようでもありえると考えるのは、事柄一般を考えることであり、可能性を思い描くことである。これに対して、他のようではなく正にこうでしかないと考えるのは、現実の個別的な事実性を考えることであり、他の可能性一般に先立つ、この特定の現実性に直面することである。

一般性・可能性に対する個別性・現実性、これら両者の対立は、本質存在と現実存在との対立である。顔の例で言えば、人間が目と鼻と口から成る顔を持つことは、人間にとって本質的なことである。顔を持つという本質存在の観点からすれば、例えば、目が大きかったり小さかったり、一重瞼だったり二重瞼だったりすることは、それぞれが可能的なことであり、目が大きいことはその可能性の一つが現実化されているに過ぎず、目が大きいか小さいかは全く偶然的なことである。ところが、人間一般についてではなく、この私について見れば、この小さい目を持っていることは、目一般の可能性の中へ、その一つの可能性として包摂して納得できるものではなく、ただ与えられた偶然的なものとして受け入れていくという形でしか納得できないものである。このように偶然性によって痛切に意識される「存在」とは、個別的なものの偶然性が暴露する「現実存在」のことである。

他のようでもありえるにもかかわらず、他ならず正にこのようでしかなく、それがこのようであることを変えることができない、このような個別的で偶然的な現象が、人間一般ではなく、他の誰でもないこの私の個別性を浮き彫りにする、このことは実存哲学の分析の示している通りである。人間が死ぬことは一般的な知識であり、この知識は私の存在に関わらないが、いずれ必ず死ぬという避けることのできない可能性は、他の誰でもないこの私の存在、その現実存在、すなわち実存を顕在化させるのだ。

だがしかし、ここで注意しなければならないのは、偶然性と現実存在との結び付きは、存在の問題が露呈される、際立った現象であるにせよ、存在一般の問題の広がりからすれば、決してその全領域を蔽うものではないということである。偶然性それ自体が可能性を考えることなしにはありえないし、現実存在もまた本質存在を考えることなしにはありえない。個別的なものの偶然性は、確かに、他の誰でもないこの私の存在を浮かび上がらせる。しかし同時にまた、その偶然性の意識を徹底させていくならば、私の存在は、他に変えることのできない実存に留まることはできず、私の実存もまた、その中に可能性の一つとして含み込まれるような、より深く大きな存在の意識（生命あるいは精神の名で呼ばれるような）へと至るであろう。

三　「存在」一般の意味

あれこれの「存在」についてではなく、「存在」一般について問う問題が立てられる必要性は、これまで挙げた例によって、十分納得されるだろう。このように、あれこれの具体的な、個々の場面や領域についてではなく、それらを包括する、ある何らかの普遍的な事柄一般について問題を立てることは、哲学においてばかりではなく、日常生活においてもしばしばある。例えば、「生きる」ことについてである。

私たちは毎日生きている。しかし、「生きる」を強調して「私は今生きている」と言うのは、死の危険に晒されて

いながらなお生き続けているという場合を除けば、不自然な言い方であり、普通はそのつどより具体的な行動や活動を言うことが多いだろう。仕事をしている、勉強をしている、家事をしている、テレビを見ている、風呂に入っている、とかである。それらもろもろの活動をしながら私は生きているであって、端的に生きていると呼ばれるべき特定の活動があって、それをして生きているというのではない。

だが、あれこれの活動をして生きている事実ではなく、あれこれのことをしながら生きている自分自身を反省して、そのようにして生きている事実の意味を考えようとする時には、「生きている」とはどういうことなのかという問いを立てる。成績が上がらずに勉強が嫌になった時、失恋して悲しみに打ちひしがれている時、自分が生きていること自体が鈍重な事実として浮かび上がってきて、「生きる」ことの不可解さが前面に現れてくる。あれこれの活動から生きていること自体への視線の方向転換が、「生きる」ことの意味を問う問いを生み出す。現に今勉強をしている限りでは、なぜ勉強しているのかを問うことはできないし、問う必要もない。また、現に今誰かとの恋愛の最中にいるのであれば、なぜ恋愛をするのか、自分自身を冷静に反省して考えることはできない。それが何かを問うことができるのは、常に、それが既に過ぎ去って終わってしまった後か、あるいは、それを相対化するような他の部分との関係を見渡すような全体的な視点を取る時か、いずれかの場合である。

生きるためにあれこれの活動をせざるを得ない人間は、そのそれぞれの意味を求めて「生きる」こと、すなわち自分自身の生の全体に立ち返らざるを得ない。なぜこの勉強をするのか、なぜこの仕事をするのか、その答えは自分自身の生からしか引き出せない。では、その「生きる」こと自体に関してはどうか。その意味を問いうるような地点に私たちは立てるだろうか。それは不可能である。なぜなら、その意味や根拠を求める問いは、ここでそれ以上遡れない限界に達するからである。

このように、人間の立てる問いは、どのような事実に関する問いであっても、そのさらなる根拠を求めようとする

と、いつしかそれ以上には答えられない問いに逢着する。（それは多分、ハイデガーが言うように、現存在はおのれの存在しうることの根拠ではあっても、その根拠を自ら置いたのでは非ざるものだからであろう。）だから、事柄一般についての問いが立てられる実際的な必要性が認められたとしても、そうした問いがどのように問われうるのか、そして、もし問われえ、考えうるとして、そこから得られた答えが元の問いに関してどのような新たな理解をもたらすのかは、それは全く予想もつかないということになる。「生きる」こと自体に、一体誰がどのような意味を与えることができるだろうか。そして、ここでの本来的な問題である、あれこれの存在するものについてではなく、そもそも「存在（する）」ということ自体についても、それを問い、その問いに答えるために、一体どのような思考が可能なのだろうか。

事柄一般についての問いの可能性と、その問いに答えることの原理的な不可能性、これら両者の狭間で思考を企て、理解を進める方途はなおも残されているだろうか。それ以上遡りえない限界を逆手にとって、すべてを矛盾なく合理的に説明する、万能ではあるが独断的な形而上学的な思弁か、あるいは、一義的な説明を避け、理解の限界を詩的想像力によって乗り越えようとする、含蓄はあるが曖昧な文学的な物語か、これら非哲学的な方途しかないのであろうか。

事柄一般の意味を問う問いが立てられたとして、それは通常の個別的な事柄についてのように概念的に把握できないし、また、特定の何か対象的なものとして表現することもできない。こうした時、事柄一般の意味をできる限り明確に理解しようとすれば、その残された可能性として考えられるのは、比喩による理解であろう。独断的な思弁に委ねるのではなく、反対にまた、曖昧な想像力に任せるのでもなく、非概念的で非対象的な事柄をできる限り包括的に理解する方法は、比喩による理解を措いて他にない。あるいは、少し控え目に言って、少なくともその最も有効な方法の一つだとは言えるだろう。

生きることを成り立たせている、あれこれの活動に対する「生きる」こと自体、あれこれの存在するものに対する「存在（する）」こと自体、前者と後者を同次元に同時に表示することはできない。それはちょうど、美しい具体的な事例を挙げることはできても、「美（美しい）」をそれと同列に表示できないのと同じである。だとすれば、次元の異なるものを両者の違いを変えないで表示するには、別種の領域に存在する同じような関係を理解の手がかりとして利用することが有益であろう。そこで以下において、「存在」について三つの仕方で比喩に基づく理解を試みることにしたい。

四　光の比喩

存在するものとは何か。それは、現れるものである。では、現れるものとは何か。それは、目に見えるものであり、見えるものという形で存在するものである。存在するものとはこうして、何よりもまず、視覚の対象として現れるもののことである。

存在するものが存在するものとして知られるのは、もちろん視覚においてばかりではない。手や足で触れることによっても、何か存在するものを知ることはできる。手で触れて感じる冷たい水、裸足の裏に感じられるさらさらした海辺の砂粒。さらに、手足といった身体の部分で感じる個体的な対象ばかりではなく、身体全体を被うようなものとして知られるものもある。温かく身体を包むように吹いてくる風、肌に突き刺すような冷たさで降ってくる雨、身体の動きに合わせて生き物のように身体にまとわりついてくるような風呂のお湯、不定形で透明であって捉えどころのないものであるこれらもまた、やはり確かに存在するものである。

視覚や触覚ばかりではなく、その他の感覚を通じても私たちはあれこれの存在するものの存在を知ることができる。耳で聴く音も、鼻でかぐ臭いも、そして舌で味わう味も、それらの感覚を引き起こした原因である、何か存在するも

のを私たちに知らせる。近しい人や見知らぬ人、人それぞれに違う顔つきが思い出せないときでも、その声を聴いてその人を思い出すということもあるし、その独特な香りによって印象付けられる植物や食べ物もある。食べ物を生で食べずに、煮たり焼いたりして、ほとんど必ず料理して味付けして食べる人間にとって、その味によってしか区別されないものもある。

人間の感覚は、それぞれに感覚の対象の存在を知らせる。しかし、何かあるものの存在を私たち人間に知らせる感覚として特に際立った重要性を持つのは、言うまでもなく視覚である。諸感覚の中で視覚が特権的な地位を占めている理由については、既に多くの人が指摘している。触覚や味覚などにおいては、感覚とそれの原因である対象とが接近しているのに対して、視覚においては、視覚的な印象とそれの原因である対象とが分離していること。したがって、対象が存在するということばかりではなく、どのような姿形で存在しているのかについても、より確実で詳細な様子を知らせてくれること。しかもその際、触覚や味覚などにおいては、感覚内容が直接身体内部に同時に位置付けられるので、その原因が身体外部にあるのか、それとも身体内部にあるのか、ややもすると区別がつかないのとは違って、視覚の場合は、ほとんど例外なく、感覚内容は身体内部に位置付けられることはなく、原因である対象の存在に帰属させられ、感覚の原因をめぐって誤謬の生じる可能性が少ないこと。例えば、熱いものを熱いと知るのは、それに触れることによってであるが、熱いものに触れた手は、その熱さに触れることによってそれ自体が熱くなってしまう。これに対して、赤いものを赤いと知るのは、それを見ることによってであるが、赤いものを見る眼は、その赤いものを見たからといって、それ自体が赤くなってしまうわけではない。そこで身体が熱いときには、気温そのものが高いこともあれば、身体が風邪の発熱で熱いこともあるのに対して、赤いものを見たときには、赤いのは見られた信号やシャツや鉛筆であるのが一般的で、目自体が赤いというのはほとんどなく、外界の知覚に関しては、視覚のほうが触覚よりも確実だということになる。

つまり、視覚は対象の存在を確実に、客観的に知らせてくれる感覚なのである。（もちろんここで、視覚が単独で対象の存在を構成できるかどうかについて、疑問の余地がないわけではない。対象の形や厚みを構成するには、他の感覚、とりわけ触覚が不可欠だとする意見もあるし、対象を一挙に全体としてではなく、特定の視点からの断面としてしか与えない視覚には、他の断面が見える可能性を現実化していく基礎として、運動する身体が不可欠だとする意見もある。だがしかし、ここではそうした議論に立ち入らない。）

（1）

存在することを現れることに、現れることを目に見えることに等値すれば、ここに、ものの存在と、その存在の認識を、目に見えることや目で見ること、つまり視覚に定位して理解する考え方が成立する。見えるものが存在するのであり、存在するものが見えるのである。そして、存在するものが見えるのは光があるからであり、存在するものを見ることができるのは同じく光があるからである。見えるものと見るものをつないでいるのは光であり、その光のおかげで私たちはものの存在を知ることができるのである。

あれこれの存在するものは、光に照らし出されることによって、存在するものとして知られる。個々の存在するものが光に照らし出されて存在することと、それらを照らし出すことによって存在するものとして現れさせる力、つまり、ものを存在させる力であり、ものが存在することの根拠である光そのものとは、同じ光でありながら、照らされるものと照らすものとして全く別物である。個々のものがそれぞれとして「存在すること」と、それら「存在するもの」をすべて等しく「存在するもの」として存在させる、存在の根拠としての「存在そのもの」は、こうして光の比喩によって十分理解できるものとなる。否それどころか、「光」の比喩は、それ自体では概念的に理解することも、具体的に形象化することもできない「存在」の不思議さを、一挙に全体として直観的に理解可能にする比喩として、プラトン以来西洋哲学の歴史において、単なる比喩以上の役割を担ってきた。感覚における視覚の絶対的な優位、

そして、対象の認識における視覚的な関係構造の圧倒的な規範性、これらは光の比喩を単なる比喩以上の地位に押し上げて、それを唯一絶対の認識モデルの地位にまで権威化する。

個々の「存在するもの」を存在させる「存在そのもの」、個々の「存在するもの」が等しく存在すると言われる限りでの、それらに共通する「存在そのもの」、この「存在そのもの」を光になぞらえること、これに留まる限り、それは存在の意味を考察する存在論の一つの有力な試みである。しかし、存在を光の比喩を使って理解しようとする試みは、その比喩に寄り掛かる余り、比喩を知らず知らずの裡に事実的な根拠と想定することになり、元々の出発点であった存在理解の試みに理論的な読み込みを押し付けてしまう、つまり、理解のための手段として採用された比喩が、それによって解明されるべき理解に先行して、比喩から得られた一定の見方を滑り込ませて、理解の方向を誤らせ、理解の内容を歪める、恐るべき暴力を振るう結果になる。

こうした比喩の持つ暴力的効果の例としては、国家を一人の人間や一つの家族になぞらえる比喩が上げられるだろう。この比喩は、国家内における分業体制や役割分割の必要性について理解するのには、非常にわかりやすく役に立つ。しかしその反面、その比喩は、ある特定の時点における身分制度や階級構成、そして政権や政治体制を正当化するのに利用されるという危険も持っている。その他に、利潤を追求する組織である会社を、先の例と同じように、一つの家族にたとえる比喩もある。会社を家族にたとえる家族主義的会社経営の功罪については、周知のように、既に多くの批判がなされている。

(2)

光はもろもろのものを存在させる力であり、もろもろのものが存在することの根拠であった。しかし、光はどこから発するのか。光の比喩に釣られて、比喩に由来する疑問に答えようとすると、その同じ比喩の枠内で何らかの答えを探さなければならない。光はどこから発するのか。それは、あらゆる光の源泉である太陽である。存在の根拠とし

て考えられた光は、それ自体存在するものではないはずであったのに、正に光と考えられたことによって、光源である太陽という、一つの存在するものと見なされることになる。存在するものの根拠である「存在そのもの」は存在するものではないはずであるのに、ある特別な「存在するもの」となる。存在そのものが存在するものではないことが忘れられ、ある特別な存在するものと見なされること、これが「形而上学」である。存在そのものを思考し理解しようとする存在論は、それをある存在するものとし、ある特別な存在するものとその他の存在するものとの関係として理解しようとする形而上学となる。

光が太陽になった時、光に照らされて見えるものは、光の中に現れ出ることによって存在することが認められるし、最も明るい光の中において、そのあるがままの本当の姿を現すのであるから、その最善の状態においてそれを知ることが、最も正しくそれを認識することだと考えられることになる。そして、それを見る人間にとっては、見えるものをその最善の状態において正しく知ることこそが、それに対処しながら行動する際の指針となるのであるから、その本質の認識はまた行動にとっても役立つものと考えられることになる。例えば、机が何であるかを知らなければ、机を作ることができないし、机が必要な時に机を探し出すこともできない。こうして光の形而上学において、光はものの「存在」と「認識」と「価値」を可能にする根拠となるのである。

光がものを照らし出し、それを見えるものとして存在させるとしても、それが存在するものとして認められるのは、それを見る者、すなわち人間がいるからである。では、人間はどうして光に照らし出されたものを見ることができるのだろうか。人間は光に照らし出されたものを目で見ることができるとはいっても、目それ自身は光ではない。では、なぜ人間は光を見ることができるのだろうか。この問いに対する答えを光の比喩の中で探そうとすれば、それは、人間の中にある光の種子、すなわち「理性」ということになるだろう。人間の認識能力である理性は、光の形而上学の下では、常に光の比喩で語られる。理性は光であり、人間は、理性によってものごとの本質を知り、その知識に従っ

て理性的な行動をするのである、だから、そういう理性を獲得していくことこそが人間の成長の目的であり、最もよく理性を働かすことが人間本来の姿であり、人間の最高の幸福だということになる。

光源としての太陽、光に照らし出されることによって、その存在と認識と価値を認められる個々のもの、そして、光によってものを見て、その見られた姿に合わせて行動する人間の中の光、すなわち理性、これら三者の関係を提示して「光の形而上学」は完結する。

(3)

光の比喩に基づく存在理解は、必然的に光の形而上学に向かうのか、それはまだ分からない。しかし、光の形而上学が存在の理解の試みに対して、単なる比喩を超越することによって、ある決定的な先入見を与えてしまうことは明らかである。

まず、光である存在そのものが、光源である「太陽」として一つの存在するものと考えられてしまっていること。次に、光に照らし出されることによって存在することになるそれぞれのものが、その最も明るい光の中で、その本来の姿を見せるはずだと考えられること、つまり、この世界に存在するもののすべて、あるいはこの世界そのものが、ある最善の状態において見れば、それらが正にそれらとして存在しているようなあり方において存在するものと考えられることである。私たちはそのつどいつも、光の中で光に照らし出された世界を見ているが、光が最もよく当たる最善の状態では、世界はその本来の姿で存在するのだ、つまり、そのつど見られる世界に対して、自体的にある「世界そのもの」というものが考えられることになる。そして最後に、私たち人間の中で、光の中でものの本質を見て取り、その認識に従って生存と生活を統制しようとする理性、人間の内なる光である「理性」が人間の本質だとみなされることである。

これらの先入見は光の形而上学に由来するものであって、光の比喩そのもの、ひいては元々の存在理解の中に既に

それとして含み込まれていたものではない。光の比喩を使った存在理解の試みは、これら形而上学的逸脱の批判的な検討を避けて通ることはできないであろう。

五　貨幣の比喩

あれこれの存在するものがそれぞれに存在しているということ、この場合、それぞれの存在するものとそれらが総じて存在しているということとは全く別々の事柄である。そこで「存在」一般をどう理解すべきという哲学的な問いが生まれる。光の比喩はその理解に向けての一つの可能性であった。だが、光の比喩は、「存在そのもの」に擬せられる光の起源に関して、それを太陽という一つの「存在するもの」に再び転化させてしまった。こうした形而上学的逸脱に陥らず、「存在するもの」と「存在そのもの」との区別をあくまで堅持しながら、両者の関係を理解できるようにする、別の可能性はないだろうか。存在そのものを存在するものとは違ったものとして、しかしながら、それを別の新たな存在するものに再び引き戻したりしないで理解する可能性、そうした可能性の一つが「貨幣」の比喩による理解の試みである。

貨幣はあらゆるものを価値として計る尺度でありながら、それ自体としては決してそれ自身によってその価値を計られるようなものではない。貨幣の価値の代理として「お金」という物体が使用されるが、価値の尺度としての貨幣にとっては、それが物体として現実に存在することは決して必要不可欠な条件であるわけではない。額面一万円の紙幣すなわち一万円札は、価値の交換の対象としてだけ必要なのであって、価値そのものを表すために必要なのではない。だから、銀行通帳に書かれた数字だけでも同じ価値を表現できるし、貨幣価値の交換についても伝票に書かれた数字だけでお互いやりとりできるのである。貨幣はあらゆるものを価値で計る尺度でありながら、それ自体は価値を持つものとして現れない。お金はそれが表示している価値だけ価値があるのではない。一万円札は決して一万円の価

値はない。一万円札が一万円の価値を持つのは、それが代理している価値として交換の道具に役立てられる限りのおいてである。貨幣はあらゆるものを価値あるものとして現れさせる力でありながら、それ自体はいかなる価値あるものでもない。光があらゆるものを照らし出して存在させる力でありながら、同時に、光の根拠である光源としては太陽、すなわちそれ自体で存在するものと考えられたのとは対照的に、貨幣は決して存在するものとして姿を現さない。

貨幣とは言わば、あらゆるものを価値という光で照らし出すが、光とは違って、それ自体は決して現れることのない巨大な闇である。あらゆるものは価値の光に照らし出されて、それぞれの価値に応じて存在するものとして現れる。価値付けられることによってものはお互いの関係の中に置かれるし、また、人間にとって所有と利用の対象となるし、さらには、人間同士の間で分配や交換の対象となる。あらゆるものを存在させ、関係付け、運動させる力が貨幣である。デモクリトスにとって、アトムが運動するためには空虚が必要であったように、ものが運動するためには貨幣という空虚が必要なのである。光の比喩が、光を存在者化させることによって光の形而上学、つまり、それ自体存在するものではない存在そのものを再び存在するものに転化させてしまう「存在（するもの）」の形而上学に変貌したのに対して、貨幣の比喩は、あくまで存在そのものを決して存在するものに転化しない存在論であり続けることができる。貨幣そのものは決して存在するものではないのであるから、存在するものから見れば端的に「無」である。

貨幣の比喩による存在理解は、どのような見通しを私たちに与えてくれるだろうか。

（1）

まず、光の比喩の場合には、ものは光に照らし出されることによって存在することになり、最もよく照らし出された時にそのものの本来の姿が現れ出ると考えられたのに対して、貨幣の比喩の場合は、ものは光と同じく貨幣の尺度に従って価値付けられることによって存在することになるのであるが、光に照らし出される場合とは違って、貨幣によって価値を計られるものは決して、それ自体として本来あるべき姿、すなわち自体的な価値を持たない。この点が

光の比喩と貨幣の比喩の決定的な違いである。貨幣の尺度によって計られるものは、その価値を離れて、それ自体の存在や本質や価値を持たない。それぞれが価値の光の中に現れ出てくるのは、その尺度に従って、それぞれのものがお互いの関係の中に置き入れられ、相互的な比率を計算されて、相対的な価格が決定される限りにおいてである。

この点に関して、次のような疑問が提起されるかもしれない。つまり、ものは確かに貨幣によってその価値を計られ、その価値の数値によって他のものと相対的に関係付けられるとしても、貨幣がものに初めて価値を付与するのではなく、貨幣によって計られる価値以前に、ものはそれにふさわしい本来の価値があったのではないか、という疑問である。こうした疑問は、貨幣を光と同じようなものと考えることから生じる疑問である。この疑問に対しては、貨幣以前にはものは価値の観点から眺められることはなかったのであるから、それ自体で何らかの価値を持っていたわけではないと答えなければならない。貨幣以前に価値の存在を想定してしまうのは、因果関係に従って、あることをそれに先行する原因による結果と見なすことから導かれる認識論的錯誤である。一摘みの香辛料、一幅の書画、一戸分の宅地、どれもがそれ自体の価値を持ってはいない。

地価の例で考えてみよう。土地が一定の価格を持つというのは、一体どういう意味だろうか。それは、そこから生産される作物が持つ価格をこれからも生み出す潜在的な可能性から計算されるか、その土地を必要とする人間の労働賃金の相対的な比率から計算されるか、そのどちらかである。したがって、不毛の土地はタダ同然になり（例えば活火山の山麓）、それを必要とする人間の数に対してはるかに広大な土地は、好きなだけタダで所有できるのである（例えばアメリカの西部開拓時代）。人間が必要とするものを何も生み出さない土地、自分以外には誰一人として所有したいと思わない土地は、タダである。もっと正確に言えば、タダなのではなく、そもそも価値を持たない。

（2）

次に、ものを貨幣の価値で計り、その価値の大小に応じてものを所有したり利用したりする人間についてであるが、

小さな光である理性の場合とは違って、価値を測定する尺度である貨幣に従ってあれこれのものを評価し価格を決定するのは人間であるから、価値評価の主体は他ならぬ人間であるかのように思えるが、価値を計られるもの自体に本来的な価値の存在が認められなかったのと同様に、その価値を計る人間も尺度自体を所有してはいないし、尺度を支配することもできない。

価値を持ったものを所有すれば、確かに、価値自体を所有しているように思われるし、価値を持ったものを管理支配し、意のままに利用処分すれば、価値を評価する権限を保持しているように思える。だが、貨幣価値は、他のものとの関係、他の人間との関係においてのみ初めて現れるのであるから、実際には、ものを所有した時に価値は消失するのであり、自分があるものに付与した価値も他の人間の承認を受けない限り無きに等しいのである。こうして人間はあくまで、貨幣の尺度に従うのであって、決して尺度そのものを所有したり、尺度の使用に関して主導権を握ったりすることはできない。価値評価の主体は、貨幣そのものなのである。

(3)

最後に、あらゆるものに価値という光を与え、物と物との交換と移動を可能にし、そして、物と人間との間に所有や利用といった相互関係を成り立たせる根拠である貨幣について見てみると、それは既に述べたように、あらゆるものを存在させながら、それ自体は決して姿を現さない「無」なのであるから、この世界が本来何であるかについても、人間の認識と行為が本来どうあるべきかについても、つまりはこの世界がどうしてこのようであるかについても、貨幣という根拠は一切答えてくれない。あらゆるものを動かしながらも、どうしてそれが他のものを動かすことができるのかについて、それは何ら十分な理由によって基礎付けられないのだから、端的に言って「無根拠」である根拠であると考えられることになる。あらゆるものが生成し運動し変化する、ただそれだけである。そこでは価値を持つものとして存在するものが立てられるが、それはただ他のものと交換され、人間によって利用される限りにおいて存在

するものでしかない。あらゆるものが存在する、しかし、それらが存在することには何ら根拠がない。むしろ根拠がないことが、それらを存在させるのである。

六　地図の比喩

存在そのものは存在するものとは存在論的に異なる。そこで異なる両者を、その差異を損なわずに保持しながら、何らかの形象において表示する比喩が求められた。そして、光の比喩においては、存在そのものは一般の存在するものとは違いながらも、しかし、ある特別な存在するもの（太陽）として考えられた。これに対して、貨幣の比喩においては、存在そのものは一般の存在するものと違い、そして、いかなる仕方においても存在しないものとして考えられた。光は存在する根拠であり、貨幣は存在しない根拠、無根拠である。

では、これら二つの可能性以外に、存在そのものを形象化して理解する可能性はないだろうか。先にあげた二つの比喩は、存在そのものを最終的に、存在するものと考えるか、存在しないものと考えるかによって互いに異なってはいたが、ものがある視点から見られて初めて存在するのだと考える点では共通している。つまり、ものは光に照らし出されることによって初めて見えるものとして存在するのであり、同様に、ものは貨幣という尺度によって価値評価されることによって初めて価値あるものとして存在するのであり、いずれの場合も、人間がものを見る時の視点として（視覚的な表現の優位！）、ものに接近するための通路となっている。

「存在そのもの」を人間が「存在するもの」に関係することを可能にする根拠として理解する、これら二つの比喩に対して、「存在そのもの」を「存在するもの」が「存在すること」を了解させる地平として理解する比喩も、十分可能である。それが、地図の比喩である。

ある地図上に描かれた記号は、一体何を表示しているのだろうか。例えば、郵便局の記号「〒」である。地図に書

かれた「〒」は、その記号に添えられた名称とともに（例えば和白局）、それだけで現実の世界にある特定の郵便局を表示していると言えるだろうか。決してそうは言えないだろう。私たちが地図を読むときのことを反省してみれば分かるように、それが現実のものを表示していると言えるのは、一方で、その記号を地図全体の中で他の記号や名称と関係付けながら、他方で、その地図を現実の世界に一定の写像関係として関係付けて、記号の意味を直観によって充実した時である。「〒」は郵便局を意味するが、その記号は単独では意味を持たない。地図上の記号が、他の地図上の記号、鉄道や道路、警察や銀行などとどういう関係にあるかを見なければならないし、それら記号の関係が現実の世界にどう重なり合うのか、どこか特定の地点を座標軸にして地図と現実を対応させ関係付けなければならない。

地図上の記号が現実の世界にあるものを存在するものとして現れさせるには、地図の記号体系の中でその記号が占める位置を理解することを必要とするし、同時に、現実の世界をもまた同様の仕方で、ある地点から四方に広がる、その全体的な配置において理解することを必要とする。記号が意味を持ち、その意味に従ってものを現前させることができるのは、ある全体的な「体系」であり、それを特定の「視点」から読み込む身体意識である。（ここで身体意識と言うのは、単なる意識では地図を現実に関係付ける接点を持ち得ないからである。身体が空間に座標の原点として存在するからこそ、地図から自分の位置を読み取ることができるし、その読み取られた位置から、まず地図の中で、次に現実の中で、他のものの位置を読み取ることができるのである。だから、意識は身体を具えているのでなければならないのだ。）

地図の比喩は、私たちの存在理解について一体どのようなことを教えてくれるだろうか。

（1）

まず、地図が存在そのものだとして、存在そのものが存在するものを存在させるのは、その地図が一つの図面であることから明らかなように、それがある全体的な関係や秩序であることによってであるということである。ここから

すれば、存在そのものを、光の比喩におけるように、ある特別な存在するものと想定するのは間違いであるし、貨幣の比喩におけるように、存在するものの側から見て決して存在しないものと断定するのも間違いであることになる。存在するものを存在させる存在そのものが存在しないように見えるのは、それが特別な存在であるからでも、それが端的な無であるからでもなく、ただそれがある全体だからである。その全体とは決して神秘的な何かではない。私たちが何かを存在するものとして知る時、私たちはいつでもそれを前提にし、支えにしているのである。

確かに、私たちが必要な時に見る、ある何らかの地図はどれも、ある地域の全体を示す地図である。しかし、どの地域についてでも、それを一つの全体として体系化する「地図そのもの」（言い換えれば、地図を作り読む能力、あるいは、地図一般という理念）は、具体的な一枚の地図のように、一つの全体として与えられる全体ではない。だが、自分で地図を作ったり、与えられた地図を読んだりするときには、私たちはいつも、この「地図そのもの」という全体を前提にし土台にしているのである。

（2）

次に、地図を読み取る人間について言えば、地図がそれだけでは記号と名称が書き込まれただけの紙片に過ぎず、何も現実的なものを存在するものとして現れさせることができず、ただそれを読み込む人間だけが、地図に従って具体的なものを現れさせることができるのと同じように、存在そのものも何か存在するものとして静止してあるのではなく、そのつど存在するものを存在させる力として、常に動的な基盤となっていると考えられる。

先には、存在そのものは静止した体系的な秩序として理解され、今度は、そのつど読み込まれることによって力を発揮する動的な基盤と理解され、これら二つの理解は互いに対立しあうもののように思われる。だが、この印象はそれぞれの側面を別々に取り上げたことからする錯覚にすぎない。これら一見矛盾する性格が決して矛盾ではないことは、地図の比喩に還ればすぐに了解されるだろう。地図を読み込む時、私たちはこれら両側面のことを難なく了解し

ているのである。そして、これら両側面が備わっているのでなければ、地図を読むことなどそもそもできないであろう。

（3）

最後に、地図の比喩から導かれる重大な結論を取り上げよう。実際の地図を例に考えると、どんな種類の、どんな縮尺の地図も、現実の世界をあるがままに、特定の視点から写像したものであり、現実の世界との間に一定の対応関係があるものと考えられる。そうでなければ、地図を読み込んで、それを頼りに現実の世界の中で目的地を探し出し、そこに到達するということが、そもそも不可能になってしまう。地図と現実との対応関係を考える限り、地図にはそれに先立って、それ自体として存在する現実の世界があるかのように考えられる。

確かに、実際の地図を見る限り、こういう想定が正しいように思われる。まず地図があって、次に、地図に基づいて現実の世界の中に進み入り、そこで行動するのではなく、私たちは地図を手にする前に既に現実の世界の中で生きてしまっている、つまり、現実がまずそれとしてあり、次に、現実の中で行動する必要から地図を作るのだ、こう考えるのが常識であろう。だが、地図としていわゆる実際の地図ではなく、地図が比喩であることを思い起こして、それを、いろいろなものの全体的な配置を示す地平だと考えると、事態は全く逆になるだろう。むしろ、こうした常識とは反対に、「地図」があってこそ、私たちはあれこれ存在するものに接近できるのであり、その「地図」以前には一つの世界という、秩序付けられた現実はないのだ、こう考えられるのではないだろうか。

まず初めに一つの客観的な現実がある、そして次に、さまざまな目的や観点に応じて、その一つの現実が一枚の地図に写像転写されるのだと、どうしても私たちは考えがちである。ところが、地図によってこそ、（正確に言えば、既に書かれた地図ばかりではなく、これから書かれるべき地図をも含む、理念としての「地図そのもの」のことであるが）、その記号の意味を通じて私たちはものに接近できるのだという事実を踏まえると、そうした常識に反して、

予め一つの現実世界というのはないということを認めざるをえない。「地図」すなわち「存在そのもの」が、「存在するもの」を存在させるのであって、それ以前に「存在するもの」がそれとして「存在すること」はないのだ、これが地図の比喩から導かれる結論である。もしここで、地図を現実に対する「解釈」と見なすならば、解釈以前に客観的な世界それ自体、「現実」そのものはないということである。

七　終わりに

さまざまな存在するものから出発して、それらが総じて存在していることに驚く時、存在とは何かという問いが生まれる。だが、この問いは、どのように問われるべきなのかも、どういう答えによって最初の驚きが氷解するのかも分からない。その問いに答える試みとして、本論文では、三つの比喩による理解の可能性を探ってみた。比喩による理解がどれだけ存在理解を明晰にするのに役立ったか、あるいは反対に、どれだけ存在理解を歪め妨げる結果を招いたか、これは今後の更なる探究によってのみ判断されることである。

付記

「存在」問題に関して私がこれまでに書いた論文は次の通りである。本論文は、これらのうち特に、最後の論文に直接つながるものである。

「根拠への問い」『創文』三一四号、一九九〇年。
「技術と芸術―ハイデガーの技術論の射程―」『金沢大学教養部論集』人文科学篇三二―一、一九九四年。
「存在とは何か、あるいは問いの発端」『金沢大学教養部論集』人文科学篇三二―二、一九九五年。
「不気味なもの」『金沢大学教養部論集』人文科学篇三三―一、一九九五年。

「見られた時間と生きられた時間」『金沢大学教養部論集』人文科学篇三三－二、一九九六年。
「形而上学的思考の本性と限界」日本現象学会編、『現象学年報』一二、一九九七年。
「存在への問いについて」哲学会編、哲学雑誌第一一六巻第七八八号『はじまり』、二〇〇一年。